

## 北野病院の歩み

北野病院 病院長 吉村 長久

### 【概要】

大正14年9月15日、公益財団法人田附興風会は、大阪市北区扇町において、京都帝国大学（現 京都大学）医学部における学術研究を助成し、研究成果の普及を図ると共に、医学研究所として学術・文化の発展に寄与することを目的として、創始者田附政次郎氏の寄附金によって設立されました。

当院は医学研究所の特性を持ち合わせた急性期総合病院として運営しています。医学研究所は12の研究部門と治験管理センターで構成され、医学研究所付設の臨床病院として、また、699病床を有する大阪における高度先進医療の基幹病院として、1,600名余りの職員を持つまでに発展してきました。

### 【成り立ち】

本財団の設立は、当時日本経済界を牽引していた綿業界のり

ーダー的存在であった実業家 田附政次郎氏が、京都帝国大学（現京都大学）医学部で胸の病を癒されたことを動機に、同大学の学術研究に資することを目的に提供された寄付金に基因しています。

1925年、文部・内務両大臣の認許を受けて同大学医学部内に財団法人田附興風会医学研究所が設立され、1928年、研究事業遂行のための臨床医学研究用病院が大阪の地に付設されることになりました。場所の選定の理由として、経済的活気にあふれた当時の大阪の市井が医学研究の豊富な資料を得るのに至便であったことや当時の大阪市当局から熱心な要望があったこともあり、医学研究の拠点を大阪の中心地へ誘致することとなりました。また、何よりも創立者である田附氏の「大阪市民に最新医学の恩恵を与えん」とする希望を尊重したことにあった様です。

財団名は、当時京都帝国大学総長であった荒木寅三郎氏によって、病院名は当時の大阪市長せきはじめ関一氏によって命名されました。

病院創設に向けて着々と準備を進めていた1927年に昭和金融恐慌が起き、財団基本金を預けていた近江銀行が突如閉

鎖、財団基本金の一部が切り捨てられることとなり、その煽りを受けて、病院規模を縮小せざるを得ない危機的状況に陥りました。しかしながら、そういった逆境の中、初代理事長今村新吉らによる病院設立への熱い意思のもと苦難を乗り越えることができ、1928年2月、開院の運びに至りました。

昭和金融恐慌後の日本経済界は不況続きで、北野病院でも同様に厳しい経営状態が長く続くこととなります。当時は全ての診療科で帝国大学医学部の顧問教授の直接指導を得られることは、北野病院の大きな特色として評されていましたので、この特色を活かして、病院職員たちの献身的な努力によって病院の使命を全うするべく経営安定化に向けて院務を続けていきました。

職員たちの努力の甲斐あって一定の評価が高まりつつあった昭和初期、1939年に第二次世界大戦が勃発したことで、多くの病院職員が戦場に駆り出され、大阪大空襲で再起不能なまでの戦禍を被ることとなりました。終戦を迎えた1945年には、連合国軍によって病院施設が接收される危機にさらされ、幾度となく連合国軍衛生部隊長のサムス大佐に執拗な強談判を受けましたが、専務理事であった三浦百重が「米国では、個人の善意による寄附でできた病院を、寄付者の意思に反して取り上げることが認められますか？」と問いかけたところ、大佐は一言の反論もなく沈黙し、1950年に病院施設は返還された、

との言い伝えが残っています。

終戦後の不安定な社会情勢、資金の調達、医師の確保など課題は山積していましたが、地域住民からの北野病院復活の強い要望を受けて、188床での全館同時再開に踏み切ることにあります。機械器具類・薬品に至るまで全てが借り物で、運転資金もほとんどない状況のもと、「医学に関する総合研究を行い、あわせて京都帝国大学医学部における学術研究を助成し、研究成果の普及を図り、もって学術・文化の発展に寄与する」という財団創立の主旨を忘れることなく日々の診療に専念し、健全な経営基盤を確立させることに努めました。

その後、診療整備が一段落した1955年、まだ順調とは言いがたい経営状態にありましたが、研究活動を常に第一として考える第9代病院長 松浦篤実の決断により、戦争で途絶えていた「北野病院業績報告」が医学研究所機関誌「北野病院紀要」として再刊されることとなり、このことが、医学研究所に付設した臨床病院という特性上、研究熱心であった多くの医師達に希望と活力を与えることになりました。

その後、救急指定病院・臨床研修指定病院・日本育英会学資金返還免除対象研究所などの指定を受けるとともに麻酔科・脳神経外科・神経内科（現在は脳神経内科に名称変更）といった新しい診療科を開設。1962年には510床、1981年には741床に増築し、急性期総合病院として大きく規模を発展

させてきました。

1928年の創設から73年が経ち、建物の老朽化が激しかったため、2001年9月に旧病院の北隣にあった旧扇町中学校の跡地に新築のうえ移転しました。

当時最新の医療情報オーダリングシステムを拡充させ、重篤な急性機能不全の患者様を24時間体制で管理し、効果的な治療を行うためにICU(集中治療室)、CCU(冠疾患集中治療室)、SCU(脳卒中集中治療室)、NICU(新生児特定集中治療室)を開設しました。また、新たな診療科として形成外科・救急部・小児外科・乳腺外科を標榜し、高度急性期病院の体制確立を目指し病院機能の拡大を行いました。そして、呼吸器・消化器・心臓・神経といった専門領域のセンター化の推進、多職種スタッフが協働し、患者様の生活の質の維持・向上、人生観を尊重した医療提供を行うために10チームの専門医療チームの立上げや、更には大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、地域周産期母子医療センターなどの指定も受け、地域の中枢病院へと成長してきました。

2008年施行の公益法人制度改革のもと、2011年に当院は財団法人から公益財団法人へと移行し、より公益性の高い事業展開を行うこととなりました。2013年には腫瘍内科、2020年には歯科口腔外科、緩和ケア科、難聴・鼓膜再生セ

ンターを開設し、現在ではより多様な診療科がそれぞれ特色のある診療を行っています。

2019年10月よりSPD(院内物流管理システム)の導入を開始し、棚卸業務の効率化やタブレットによる在庫の見える化、RFID(電波自動読み取り技術)のICチップを利用することによる材料のトレーサビリティが可能となりましたが、こういったICT化への対応は今後の病院経営のキースクセスファクターとなることから、効率化、自動化による省力化といった視点でデジタル化の推進も行っていく計画をしています。

今年度は、診療面において高度な放射線治療の集積や一層の地域貢献のための機能の提供を目的とした新館が完成し、敷地の持つポテンシャルを最大限活用し本館機能の一部移転により医療機能の有効活用を図る北野病院の新たなフェーズの礎となります。さらには本館の機能拡張やリニューアルのためのリノベーション事業が2023年まで継続し、北野病院の歴史を未来へ繋げていくための最先端の医療環境整備を計画しています。

次なるイベントとして2025年には北野病院の創立100周年を迎えることとなります。医療を取り巻く環境の悪化や先行き不透明な時代ではありますが、これからの社会ニーズの多様化、医療制度の変化に対応していくべく「成長と変化」が求め

られています。創設者田附政次郎の実業家としての魂を受けつ  
ぎ、病院理念のもと京都大学との医療提携による最高品質の医  
療の提供、そして、大阪北野の地における診療貢献のために、  
地域の皆様とともに持続可能な発展を目指していきたいと思い  
ます。



北野病院外来風景1



北野病院外来風景2